
不器用なクリスマス

チラリズム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不器用なクリスマス

【Zコード】

Z3012B

【作者名】

チラリズム

【あらすじ】

コンビニでアルバイトをしている19歳の主人公が、つまらないと思っていた世の中から恋を見つけだす物語。

人間は不器用な生き方しかできない、必死になつて生きていくしかできない。

僕も不器用で最低な男だ、高校を卒業しても職に就いていない。今は週に5日、夜のコンビニでアルバイトをするだけの毎日。

楽しいことなんてなにもない、今日はクリスマスイブだけど……そんなのは僕にとって唯の365日の1日にすぎない。

特別な日でも何でもない。
僕はいつもそう思っていた。

今日は客が少ない、皆が恋人や家族とカラオケなどで楽しんでいるのだろう。

そんなんかで黙々と仕事をしているのが同じアルバイト店員の栗原くりはら七海ななみ

僕より2つ年上の先輩で身長は150センチくらいと小柄、僕より20センチも低い。細身な体でよく働き、泣き言も言わず評判もいい。腰くらいまである黒い髪、モデルみたいな綺麗なウェーブをしていてヒマな時に両手の指先を全て合わせるのが癖。

大学生らしいが、僕が知っているのはそれくらいだ。高校を卒業するなりフリーーターとしてコンビニで働いているだけの僕とは違う。小さいけれど大きな人だ。普段は大人しい性格だけど、僕が新米だった時に来店してきた人相の怖い3人組の男に脅されると真っ先に間に割つて入り一步も退かずに話し合いで追い返してくれた。

そういうえば、まだあの時のお礼をしていない。

「レジの前に置いてあつたケーキ売り切れましたね」

彼女から返事はない、ほとんど会話をしない僕達だが今日は何故か
彼女と喋りたくてしかたがなかつた。

何故だろうか？

『ピロリンピロリン』

「いらっしゃいます」

いらっしゃいます、よく聞く彼女の言葉はコレくらいだ。

黒いースーツを着た男性客が店内をウロツく。

その後に母親が男の子を連れて店内に入り、雑誌コーナーの前で立ち止まると何かを思い出したように引き返して店を出る。

お母さんジユースは？ と男の子が母親に聞いたが再び店に戻つてくることはなかつた。

栗原七海はいつものように両手の指先を合わせながら、一週間くらい前から店内に置かれているクリスマスツリーをボーとした顔で見ている。

小さな子供達が触つたり倒したりしたせいか、もうクシャクシャになり折れ曲がつていてるクリスマスツリー。

僕が小さく欠伸をした時に黒いースーツの男性客はカゴの中にビールを2本とカツブラーーメンを入れて僕が立つていてるレジの前に来た。僕と一度目が合うが、わざわざ移動して栗原七海のいるレジの前に向かつた。

栗原七海がカゴの中から商品を取り出し、ピッピッヒリズムよく値段を確認して合計を読み上げるが黒いースーツの男性客は彼女の後ろを指さして『……ソレも』とタバコの銘柄も言わずに小声で栗原七海に頼んだ。

彼女は客の指の方向を予測してタバコを手に取る、男はコクリと頷

いた。

その間、僕は外に出て店の前をホウキとチリトリを両手に掃除をしていた。

「ゴミ箱や自転車をどかしてゴミを集める。

「ありがとうございました」

彼女の声が店内から聞こえたと同時に黒いスーツの男が咳き込みながら出てきて暗い夜の街へ姿を消した。

ある程度のゴミや落ち葉を集めて、掃除を終えた僕が店に入るなり栗原七海は僕に話しかけてきた。

「……和也」

今更だが僕の名前は一ノ瀬和也いちのせ かずや

アルバイト初日の時に、初対面だった彼女はいきなり僕のことを呼び捨てにした。

年上だし別にどうでもよかつたが、なんだか意外だった。

「はい、なんですか？」

「商品……並べるの手伝つて」

1時間くらい前にトラックで運ばれてきた商品が手付かずでお弁当コーナーの前に置かれていた。

「は、はい」

一人でお弁当を並べる、彼女は器用だ。綺麗にお弁当を並べる。僕は不器用だ。僕が一度並べたお弁当を、さりげなく栗原七海が綺麗に並べる。

申し訳なかった。

いつの間にか僕は彼女と一緒に作業することに居心地を感じていた。

「ハハビ、」の「ハハビ」で楽しこと「気持ち」を生まれて初めて感じた気がした。

それは好きとか「う気持ち」と解釈していいのだらうか？

「あの……栗原さんは」

「七海」

「えつ」

「七海でこいよ」

「あ。えつ……その、七海は」のアルバイトにつまんで続けるの？」「わからない……どうして？」

「いや、できるだけ一緒にやつていきたいなつて思つて……ハハは僕が楽しいと思える場所かもしれないから。生きてるつて感じがするのかな？ わからないけど」

「そつ……よく聞くわね、今をつまく生きれば」いつ

次に彼女はヨーグルトを並べ始めた。

お客様が来る様子はない。

彼女は一度も僕の方を見てはくれない。

「あの……僕、ちゃんとやりますか？ ちゃんと生きますか？」

僕は何を聞いているのだろうか？

どんな答えを期待したいのだろうか？

「私から見れば……」

「……？」

「あなたは止まつてゐるよつて見える」

「えつ？」

「動けないのよ、背中のゼンマイが巻かれてないから。ずっと、

止まつてゐる

そつ言うと彼女は一言も喋らなくなつた、アルバイトの交代が来るまで一言も。

僕は止まつてゐる、それは心のことだろつか？

僕は考えた、何もできない僕に神は愛想つかしたのだろつかと……どうすれば僕のゼンマイは巻かれるのだろかと。

「おつかれさまでした」

私服に着替え、交代したアルバイトの人へ一言挨拶してから僕と彼女は同時に外へ出る。彼女は後ろの髪を赤いゴムで結んでいる、帰る時はいつもこの髪型だ。

もちろん僕はこのままじゃ帰れないと思った、彼女と別れちゃいけないと思った。

でも何を語りかければいいのかわからぬ。

そつこいつしてゐ間に、彼女は自分の単車に跨り走り出した。

「あのつー…」

頭の中で言葉の整理ができずに、僕は彼女を呼び止めてしまつた。

「…………なに？」

「その、ちょっと話しませんか？ 僕このまま帰っちゃいけない気がして、うまく言えないけど……ダメですか？」

「いいけど」

彼女はエンジンをきり、単車から降りた。

彼女は僕が追いつくのを待つて、単車を押して一緒に歩いてくれた。

彼女と僕の家は方向が一緒なので、口から約10分間が僕に与え

られた大切な時間だ。

雪は降っていないけど寒いことに変わりなく、僕の口からも彼女の口からも白い息がハツキリと見える。先に口を開いたのは栗原七海だった。

「サンタ……今頃は大忙しね
「わづですね」

空を見上げる彼女の横顔は、まるで女神のように美しかった。こう思えるのもやはり僕は……。

「僕思うんです。女性はいつまでも自分を輝かせて、男性は輝く女性をいつまでもサポートする。女性が王女なら男性は王女を守る騎士みたいな……わかります？」

「ええ、なんとなく」

「つまり……何が言いたいかって言つと」

僕は彼女の横顔を見つめた。

彼女はずっと前を見ながら僕に耳を向けている。

「好きです、七海のこと……僕は七海を守る騎士になりたい」

この言葉の意味は、こんな僕でもわかってる。急にこんな恥ずかしいセリフを出したのも十分わかってる。

僕は不器用だ、でも好きな人ができたんだ。

「……そう」

「僕は、君と出会えた奇跡信じてみたいと思つた。話したいことつて言つのは「このことです」

「……そう

それから僕の家の近くにある駅までの5分間、沈黙が続いた。
そして彼女はゆっくりと口を開いた。

「しばらく考えてみた」

「……え」

「和也のこと」

彼女は押していた単車を止めて僕を見上げた。

「和也のこと、今は好きかどうかわからない……でも
「でも？」

「私でいいなら巻いてあげる、和也のゼンマイ……」

「僕の？」

「そ……私じゃ不満？」

「いや、そんな！ 全然不満じゃないよ！」

僕は、これから動きだす。

止まっていた僕はもういらない、これからは一人の人間として動き
出す。つまらない生き方をしていた僕のゼンマイは……栗原七海に
よつて巻かれた。

僕はただ、恋をしただけ。

闇の中で手探りしていると、目の前に光が現れて……そこから一人
の女性が現れる。

それが栗原七海……僕は彼女に恋をしただけ。

僕達は不器用だ、でも必死に生きている。

それってスゴく素晴らしいこと……。

今の僕は、そう思えることができる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3012b/>

不器用なクリスマス

2010年10月10日03時39分発行